

# 栃木県 鹿沼市

CLOSE UP  
人づくり⑩

昨年十一月二十六日、当センターの研

修の活用状況等を取材するため、JR日光線・鹿沼駅で下車し、街並みや遠く雪化粧した日光連山を眺めながら、鹿沼市役所へと向かった。途中、一級河川・黒川に架かる府中橋を渡るとき、複数箇所護岸崩壊が目に入った。九月九日～十一日にかけて記録的な大雨を降らせた関東・東北豪雨の爪痕だ。いまの静かな水面からは想像できない



鹿沼市庁舎

濁流はこの地も襲った。

黒川のほとりには明治洋館風の鹿沼市立川上澄生美術館がある。鹿沼市出身で川上澄生の教え子が二〇〇〇点の作品を提供し、平成四年に開館した。川上澄生は大正から昭和にかけて活躍した木版画家で、诗情豊かな作風から「木版画の詩人」と称された。この瀟洒な美術館を右手に見ながら一〇分ほど歩いたところに市庁舎はある。

## 鹿沼市のプロフィール

鹿沼市は、栃木県の県央西部に位置し、東は県都宇都宮市、北は国際観光地である日光市に接している。地域の約七割が森林で覆われ、西北部の山々からは多くの河川が流れる、約九万九五〇〇人（平成二六年現在）の人口の自然豊かな地方都市である。市内には東武日光線とJR日光線が通り、いずれも東京までを約八〇分で結んでいる。また東北縦貫自動車道の鹿沼ICがあ

り、近接して北関東自動車道が走るなど高い交通利便性を有し、企業誘致も盛んだ。

地場産業では家具や建具などの木工業が古くから根つき、「木工のまち」として全国的に知られる。その優れた技術力は江戸時代より受け継がれる絢爛豪華な彫刻屋台によって培われた。屋台づくりには日光東照宮を修営した彫師も携わったと伝えられ、当時のものも修復を重ねながら数多く現存している。毎年十月の第二土曜・日曜に行われる「鹿沼秋祭り」では、これらの屋台二〇数台が市街地を練り歩き、「ぶつつけ」と呼ばれるお囃子が競演し、その勇壮華麗な時代絵巻を目当てに大勢の見物客が集う。現在、鹿沼が誇るこの伝統行事は全国三二件の山・鉾・屋台行事とともにユネスコ無形文化遺産への登録を申請しており、市でもその実現に向けて「彫刻屋台のまち鹿沼」のPRに力を入れている。

農業ではいちご、にら、こんにゃくの生産が盛んで、また「鹿沼土」と呼ばれる軽石土、さつきの産地としてもよく知られている。毎年五月の最終土曜から十日間開催される「鹿沼さつき祭り」は、全国各地の愛好家が丹精込



鹿沼市立川上澄生美術館

めて育てたさつきの大展示会をはじめ、さつきの展示即売や特産品の販売などがあり、「鹿沼秋祭り」とともに鹿沼の二大祭りとして観光の目玉となっている。

鹿沼市の第六次総合計画（平成二四年～三三年）では「自然と共に歩む人情味あふれる絆のまち」を将来都市像に掲げ、人と人の結びつきに重点を置いてまちづくりを展開している。これを具現化している事業に「まちの駅」の取り組みがある。まちの駅は、来訪者が気軽に立ち寄ることができ、地域の情報などが得られる、いわば道の駅のまち版で、もともとはNPO法人地



彫刻屋台が織りなす  
勇壮華麗な時代絵巻  
「鹿沼秋祭り」



全国最大級のさつきのイベント  
「鹿沼さつき祭り」

域交流センターが「ひと・テーマ・まちをつなぐ拠点」として立ち上げた。まちの駅は全国的な広がりを見せているが、鹿沼市の設置数は一〇〇か所に達し、全国一のネットワークを形成している。平成三年に市が整備した「新・鹿沼宿」には新鮮な地元農産物の直売所や鹿沼ブランドなどの物産品販売、食事コーナーなどがあり、まちの駅の中核施設として多くの人で賑わっている。

## 鹿沼市人材育成基本方針

鹿沼市では、平成十二年に「人材育成基本計画」を策定して人材の育成を進めてきたが、組織の活性化や体質の強化をさらに図っていくため、平成二十四年、「人材育成基本方針」を新たに策定した。策定の背景には、地方自治体の多くがさうであるように、地方自治

権の進展に伴い業務量が増える一方で、財政難や効率化等の理由により、職員数を増やすことが難しい状況がある。この点について、人事課の安生秀徳さんは「職員一人ひとりの負担が増している中だからこそ、その一人ひとりの資質の向上を図り、能力を最大限に引き出していくことが組織運営の大きな課題となっている」と説明する。

鹿沼市の人材育成基本方針は、「かぬまを愛し、市民と共に行動する職員」を目指す職員像に定め、市民と協働のまちづくりを推進する人材の育成を基本テーマに据えた。これに基づき、

- ①業務に誇りとやりがいを持つ職員、
- ②プロフェッショナルである職員、③自ら考え、行動する職員、④市民と協働をする職員、⑤かぬまに愛着と誇りを持つ職員を行動理念に掲げている。

また人材育成の方向性では、人だけでなく、組織のあり方にも焦点を当てていくことが必要として、①人材育成システムの構築、②人材開発の充実・強化、③組織風土・職場環境の改革の三点を基本に進めるとしている。人材開発の充実・強化に関しては、従来、その柱となる研修制度では人事部門における指名研修が中心だったことを踏



まちの駅「新・鹿沼宿」の外観と、新鮮な地元農産物などが並ぶ店内

まえ、今後の能力開発の実施にあたっては、これまでの職場外研修に加え、職場研修と自己啓発支援に重点を置きながら能動的な体系を整備し、職員が

自ら学ぶための環境づくりを図る必要性に言及している。

## センター研修の活用状況

鹿沼市のセンター研修への参加者は〈別表〉のとおり、平成二七年度は一〇名で、例年ほぼ同数の職員を派遣いただいている。派遣部署である都市建設部の鈴木誠一部長は「市職員の仕事は様々な分野にわたり、例えば土木の中にも、橋梁系もあれば、道路系、河



鈴木都市建設部長（前列中央）をはじめお話を伺った鹿沼市職員の皆さん

川系、都市計画系もあって、異動した場所では即戦力として働かなければならない。そのときは広く浅くではなく、深くというスタイルになりますので、一週間なりの専門的な研修で身につくものは大きい」と、センター研修を評価する。加えて、同様の仕事を担当している他の自治体の人たちと交流を深め、「鹿沼はこうなんだよ」「いや、私のまちはこうなんだよ」と、見聞を広めてこられるのも研修の良さと指摘した。

センター研修に対する要望については、「メンテナンス関連の実践的な研修メニューの充実」を一番に挙げた。その理由を鈴木部長はこう説明する。「例えば橋梁メンテナンスにしても五年に一回の定期点検が義務づけられているわけですが、本市には八〇〇橋からの橋梁があります。これを単純に五年で割れば、毎年一六〇橋を点検しなければなりません。実際にそれらを外注に出すと数千万円のコストがかかりますので、少なくとも自分たちでできる橋は、自分たちでやらなければならない。

本市でも技術職員の不足が深刻な課題ではあります。しかしその中でも、研修などを通じて、インフラのメンテナンスに対応できる人材の育成が急務だと考えています」。

## センター研修を受講した感想

最後にセンター研修の感想について、都市計画課の安納慎也さんと山口

貴亮さんにお聞きした。安納さんは平成二五年に入庁、その三か月後、行政職員を対象とする開発許可事務の基礎的な研修である『開発許可』を受講した。「右も左もわからない中で行かせてもらったのですが、開発許可制度や審査の流れなどをわかりやすく解説していただいた」と振り返る。安納さんはいまも同じ業務を担当しているが、業者対応の際に知識不足を感じることもあるといい、「業務の都合が許せば、上のレベルの『開発許可専門』を受講して、さらに能力を身につけたい」と意欲を示した。

一方、山口さんは二七年度の新規研

鹿沼市のセンター研修参加状況（平成27年度）  
【参加人数：10名】

参加研修名	研修期間
公園・都市緑化	5日
コンパクトシティ	3日
都市計画	5日
景観まちづくり	5日
交通まちづくり	4日
地域の浸水対策	3日
開発許可I	4日
道路設計演習	4日
公共建築工事積算	5日
公共建築設備工事積算（電気）	3日

修である『コンパクトシティ』、また二六年度は国土交通省土地・建設産業局が実施主体となっている『土地調査員』を受講した。「いままで泊まりがけの研修経験がなく、まずそれが新鮮だったのと、日々の業務がその場、その場の対応になっていく面があったので、体系的に学ぶ機会を得られて嬉しかった」と振り返り、『コンパクトシティ』に関しては、立地適正化計画での居住誘導区域や都市機能誘導区域などの基本部分をしっかり理解できたという。鹿沼市の立地適正化計画の策定はまだ検討段階だそうだが、「本市においてどう反映できるかを考える上で、研修で得た知識が助けになっている」と話した。